

保育における間の模索と創造

河 邊 泉

五才になったばかりのK児と、電車のレールを繋いで遊んだ時のことである。ちょうどレールを繋ぎ終えた時に、遊びの終了時刻になって終ったのである。折角、部屋一杯にレールを繋いだのだから、きつと電車を走らせて遊びを続けたいだろう。だのに終了の時刻になったことをここで告げれば当然、反撥をすることが私には充分推察できた。

しかし、ここでは、現実の状況をまず彼に知らせ、わかってもらいたいと考え、終了の時刻になったことを伝えた。告げ終るか終らないうちに「いや」というが早い電車を走らせてレールの上に置き走らせていた。既に彼にも終了時刻と私の心が見えていたのではないかとさえ思われる程すばやい動きだった。

電車がひと廻りしたところで、もう一度、同じことを伝えた。「2回まわったら止めようね」と言った。待っていたとばかりに「2回、3回、4回、5回、……ずっと……」と激しい口調が返って来た。こうした場面に時々出会って経験していてもその時の彼の要求の意外な強さに瞬間ためらった。またこの時の電車が廻るのが、とても速く感じられた。同時に彼の表情に緊張感が少しずつ高まりつゝあるのも感じとれた。それから2〜3周、電車が廻るのを沈黙して見守った。電車がトンネルをくぐり抜けた時「もっともつと遊びたいけれど、駅のところに来たら止めようか」と言っていた。「止めようか。」のことが終るか終らないうちに彼は駅のところまで動いて、電車の来るのを待ちかまえた。そして差しの

べた手には電車が握られ、そっと棚にもどすとそのあと何時もよりもすばやくレールなどを片づけ終え、いかにも満足気な表情で「またあしたもする」と言って迎えの母親のところへ駈けていった。

このことは保育の課程で幼児と保育者がかかわる時における様々な現象の中で体験することのひとつに似ている。特に「かたづけ」と呼ばれている活動に移る前によくみられる状況に似ているであろう。ひとつの活動から次の活動へ移行するような行動のけじめについて確実に学ばせなければと、例えば自発的な遊びの終了を音楽のレコードをかけて知らせ、一斉にすみやかにかたづけさせて、次の計画した活動にスムーズに移行させることを日課のように指導されている幼稚園や保育所を見かける。しかし先生達の考えられるようにはスムーズに運ばないし、子どもたちの身についていけないようである。

ひとりひとりの子どもをよく見てみると、前述のような子どもが多くいることに気づかれると思う。それは単に保育の対象としての子どもについてというよりも、子どもと保育者の関係について考えてみる必要があるだろう。

「ルールや約束をわからせ、これを守ることを学ばせたい」との目標をかかげて躾や生活訓練をと実践されているが、現実を認識させるためにその現実の状況を知らせたり、わからせることはあっても、幼児自身の要求が強く保育者のもつ社会的要求と大きくズレるとき、幼児自身が自分の要求や目的を保育者の要求や目的と調和させたり、幼児自身が自分のものとしてとり込んでこれを統合させていくことは大へんむずかしいことである。しかし、このことは子どもたちが幼児期から少しずつ学んでいかなければならないことである。それはエリクソンの言う「子どもの側において、社会機構の中に統合されうるに十分な強さ……」すなわちこれを学ぶことのできる力を既にもっているからである。

ルールをわからせなければと考える前に私の体験にあったように「止めよう」から「止めよう」といつの間にか変化していったように、子どもに現実の状況を知らせると共に子どもの世界を共有しながら子どもと共に両者の要求の接点を具体的に模索し、発見創造していかねばならないと思う。これを保育における間の創造と言えないだろうか。このことは保育そのもののあり方だとも思う。

(洗足短期大学)